

本学一般学生が体育実技を履修する価値の再考

—履修学生による体育授業評価尺度の調査結果による検討—

古田 康生 (岐阜協立大学経営学部)

原田 理人 (岐阜協立大学経営学部)

キーワード：高等学校保健体育科，大学体育，レクスポーツ，体育授業評価，態度尺度

1. 序論

1.1 本研究の背景 (大学設置基準の大綱化による全国の大学必修体育の選択科目化)

大学設置基準の大綱化は、1991年(平成3年)に実施された大学設置基準等の改正を指す。大綱化以前の大学カリキュラムは、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目及び専門教育科目の区別が定められ、それぞれ卒業に必要な単位数が、一般教育科目 36 単位、外国語科目 8 単位、保健体育科目 4 単位、専門教育科目 76 単位の計 124 単位と定められていた。しかし、1984年(昭和59年)に設置された臨時教育審議会は、1986年(昭和61年)の第二次答申で、高等教育の個性化・多様化等を求める答申をした。そのためその後設置された大学審議会の答申を受けて1989年(平成元年)の大学院設置基準の改正、1991年(平成3年)の学校教育法等の改正、同年の大学設置基準・学位規則の改正等が行われた。このうち1991年の大学設置基準の改正により大学に対する規制が大幅に緩和された。大学設置基準の改正により大学の教育カリキュラムは、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目及び専門教育科目の区別が廃止され、卒業に必要な単位数は124単位で変わらないものの、科目区分と単位数の設定は、各大学が自由に設定できるように変更された。教育科目の区分の廃止に伴い、多くの大学で一般教育科目や第二外国語、体育実技などの教養科目の削減が実施された(杉山ほか, 2011)。岐阜協立大学(以下、本学とする)でも、2018年以降の5年間で体育実技の開講コマ数(授業数)を減少させ人件費を削減する案が協議された。これに対して、体育実技担当教員から、①アクティブラーニングなど体育実技授業における心身の健康づくり以外の教育的価値の存在、②開講する種目特性とその教場(体育館などの種々のスポーツ施設)の許容人数による安全性の確保のための開講種目数の維持、③各種目の履修人数と身体活動量による学生の教育目的の達成と満足度、④障がいの有無に関わらず全ての学生にスポーツの機会提供する保健クラスの存在などを根拠に現行の維持を主張した過去がある。以下、本研究では、本学にて一般教養科目の卒業必修科目として開講される体育実技A及びBを「大学体育」と表記する。また、本研究で調査対象となった学生が受講した体育実技は、体育実技B(レクスポーツ)であるため、他の体育実技種目のバレーボールやサッカー、卓球、トレーニング、バドミントンといった授業種目と区別するため必要に応じて体育実技B(レクスポーツ)と記す。

1.2 アクティブラーニングとしての大学体育(体育実技)の価値の見直し

近年、大学教育における能動的な教育手法が求められている。引原ほか(2016)は、経済産業省(2018)が提唱した社会人基礎力、すなわち「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チー

ムで働く力（チームワーク）」の3つ能力には、学生の自発性や積極性といった能動的態度や、意見や立場が異なる他者と協同して課題を探し、達成していく力やその過程で経験する対人的相互作用、すなわち非言語的・言語的コミュニケーションを図れる力がその共通要素としてある、としている。そして、これらの能力が育成される数少ない大学教育科目として体育・スポーツ系科目を挙げている。そのため体育・スポーツ系科目は、アクティブラーニングが展開できる貴重な科目になり得る可能性がある、主張としている。その根拠としたのが体育・スポーツ実技授業などのスポーツ教育をテーマにした大学授業（大学体育）での社会人基礎力が向上する可能性が示された複数の研究報告である。森田ほかは、一連の大学体育に関する研究にて（森田ほか（2009）や森田ほか（2011）、森田（2014））、学生が体育・スポーツといった身体活動を通じて主体的に学び、立場や意見が異なる他者と課題を見出して解決する能力、すなわち課題探究能力や社会人基礎力の育成という新たな教育的価値が大学体育にて培われる可能性を示唆している。また、その他の種々の大学体育に関する研究報告（金田ほか、2020）を根拠に、大学教育の大綱化以前の大学体育の教育的目標は、「体力や種々のスポーツ技能の獲得」、「健康の維持増進」、「生涯スポーツ実践の動機づけ」といった項目が中心であったが、近年では社会人基礎力など主にアクティブラーニングという教育手法により育成されると考えられる教育効果が教育目標に加えられるようになっている。

1.3 体育実技B（レクスポーツ）の授業評価アンケート結果（2022年後期）

本学教務委員会(2023)が公表した 2022 年度後期授業アンケート全体集計(学科別)によると、「この授業にこれまで出席し、どのように感じていますか」の質問項目に対して 5 件法で回答を求めた結果、「とても満足」が 46.2%、「やや満足」が 32.5%と回答している(4,494 件の回答中)、と報告している。これに対して、本研究で調査対象となったスポーツ学生は体育実技 B(レクスポーツ)に対して、「とても満足」が 67.7%、「やや満足」が 25.8%と回答している。一方、同じく体育実技 B(レクスポーツ)を受講した一般学生では、「とても満足」が 76.5%、「やや満足」が 17.6%と回答している。つまり、本学の体育実技 B(レクスポーツ)を履修する学生からは開講科目全体の平均値以上の評価が得られている。ただし、授業の「満足度が高い」と学生の「学びたい」との関連性は本結果からは断言できないため引き続きサンプルを増やして検証する必要がある。

2. 研究目的

本研究の目的は、本学の大学体育の価値を学習者の目線で再考することである。そのためには、単に授業担当者がその意義と価値を一方向的に主張するだけでなく、学習者である受講学生の意見を妥当性が複数の研究者により検証された尺度を用いて調査し、客観的根拠を示す必要がある。そのための基礎的な資料を得ることが本研究の目的である。また、今回使用する尺度は授業改善に役立てられる情報をフィードバックする目的に確立された尺度であるため、本学の体育実技（レクスポーツ）の授業改善に役立てられる知見を得ることも合わせて目的とする。

3. 研究方法

3.1 調査対象者（体育実技B（レクスポーツ）受講学生）

今回の調査では、本学に在籍し、体育実技B（レクスポーツ：後期開講科目）を受講した経営学部スポーツ経営学科（スポーツ経営スポーツ専攻）学生（以下、スポーツ学生とする）31名とスポーツを専攻しない非スポーツ学生（以下、一般学生とする）19名を調査対象学生とした。なお、全て1年次（初年次）学生

であった。

3.2 調査期間

調査期間は、2022年9月（2022年度後期開講月）から15回目の授業が実施された2023年1月とし、介入前調査は2022年9月下旬、介入後調査は2023年1月下旬に実施した。

3.3 調査方法

質問紙調査は記名自記式質問紙法を用いた。質問紙の配布は集合配布とし、本学講義室にて依頼文書および質問紙を配布して文書と口頭により研究主旨を説明して研究協力を依頼した。研究主旨や回答方法、質問紙の回収法、倫理的配慮など一連の説明をし、研究者が講義室を退室した後に調査対象学生は質問紙に回答し、質問紙は回収ボックスに提出させ、留め置き法にて回収した。

3.4 調査対象・実施授業科目

本研究で対象とした授業科目はいずれも体育実B（レクスポーツ）であるが、スポーツ学生は卒業必修科目の基礎教養科目（区分）体育の「体育実技B（レクスポーツ）」とした。一般学生は選択科目の基礎教養科目（区分）の体育の「体育実技（レクスポーツ）」とした。どちらも、同一の授業担当者により授業運営され、バレーボールや卓球、サッカーといった復習の種目から自由意思にてレクスポーツが選択された。

3.5 調査項目

(1) 調査対象学生に関する基本属性

調査対象学生に関する基本的属性として、所属する学部学科、学年、年齢、性別を回答させた。

(2) 運動・スポーツ活動の志向

調査対象学生が自覚している運動・スポーツに対する志向認識を5段階で回答させた。すなわち、とても好きが5点、好きが4点、どちらでもないが3点、嫌いが2点、とても嫌いが1点としていずれかを選択させた。また、運動・スポーツの自覚する得意・不得意（苦手）を5段階で回答させた。すなわち、とても得意が5点、得意が4点、どちらでもないが3点、苦手な2点、とても苦手な1点としていずれかを選択して回答させた。

(3) 体育授業評価尺度

小林（1982）が作成した「態度測定による体育の授業診断」（以下、体育授業評価尺度とする）を使用し、高等学校での体育（保健体育科）と本学での体育実技B（レクスポーツ）の授業について30の質問項目に回答させた。この尺度は、1970年代に小学生高学年から中学生、高等学校生、大学生までを対象に子どもの目を通した授業評価から授業改善に役立てるためのフィードバック情報を得るために作成された尺度である。児童、生徒そして学生といった学習者の授業に対する態度が「運動の喜び」、「授業内容に対する評価」、「授業に対する価値観」の3つの因子で捉えることが可能で、3つの次元からなる評価基準が示されている。3つの因子に対してそれぞれ10の質問項目があり3件法で回答を求め、質問に対して当てはまるは○、どちらともいえないは△、当てはまらないは×で回答させ、その後、○は1、△は0、×は-1（マイナス1）に換算して集計した。なお、一部の質問に反転項目があるが、それらは集計時に変換した。この「体育授業評価尺度」は、その後、複数の研究者（高田ほか、2000、奥村ほか、1989）によって発展的研究が進められているが今回は大学生を対象としている点や大学生を対象に新型コロナウイルス感染症が拡大する前の実測値との比較が可能な研究報告（塙と高橋、2008）が小林（1982）の「体育授業評価尺度」を使用して

いたことから本研究でも小林（1982）の「体育授業評価尺度（30の質問項目）」をそのまま用いた。

(4) 履修動機と楽しかった種目

受講学生個人が「なぜこの科目を履修したか」の理由を把握するため履修動機を自由記述により回答させた。また、体育実技B（レクスポーツ）では、ソフトバレーボールやフライングディスク、ゴルフなど複数のニュースポーツ種目を実施したため、その内で「楽しかった」及び「印象的だった」種目を複数選択で回答させた。

3.6 統計処理（今回は実施していない）

本来であれば、スポーツ学生と一般学生の「体育授業評価尺度」の得点平均値の差は順位尺度に関する検定の対応のある場合の方法に従い有意差を検定すべきである。すなわち、スポーツ学生及び一般学生の高等学校までと体育実技 B（レクスポーツ）受講後の体育授業評価尺度得点平均値と標準偏差を算出し、Wilcoxon の符号付き順位検定（ウィルコクソンの T テスト）を用い、またスポーツ学生と一般学生の回答結果の比較では、順位尺度に関する検定の 2 つの代表値の差の検定のマンホイットニーの U 検定を用い、有意水準は 5% で検定しなければならない。しかし、今回はサンプル数が少ないため、傾向を把握することとどめた。

3.7 倫理的配慮

研究協力を得て調査対象となった学生に対し、研究主旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては個人情報保護を遵守し、得られたデータは統計的に処理され集団の結果とするため個人が特定されない、データは本研究の目的以外では使用しない、調査協力は自由であり、不参加や途中で中止であっても、不利益は生じないと説明し同意を得た後に回答させ、回答の提出をもって同意が得られたものとした。なお、本研究は岐阜協立大学研究推進委員会規則『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

4. 結果

4.1 調査対象学生

今回の調査で質問紙は 50 名配布され、欠損値のない回収紙は、合計 50 名分であった。内訳を表 1 に示した。回収率は、100% であった。なお、平均年齢はスポーツ学生が 18.88 歳、一般学生が 19.31 歳であり、一般学生の 2 名が過年度生で、それ以外の 48 名は新卒入学の初年次学生であった（表 1）。

表1 調査対象学生の平均年齢と属性別人数

	年齢 平均値 (標準偏差)	男子学生	女子学生	小計
スポーツ学生	18.88 (0.38)	20	11	31
一般学生	19.31 (2.12)	7	12	19
小計		27	23	50

単位: 平均年齢は歳、人数は人

4.2 調査対象学生の運動・スポーツに対する認識（好き・嫌いと得意・苦手）

表 2 は、調査対象学生が自覚する運動・スポーツに対する認識、すなわち運動・スポーツが好き・嫌い、

及び、運動・スポーツが得意・苦手の回答結果である。

まず、運動・スポーツが好き・嫌いの回答では、スポーツ学生において「とても好き」が70.97%と最も多く、「好き」を含めると90.32%の学生が肯定的に回答した。一方、一般学生では、「とても好き」と「好き」が61.10%であり、40%弱の学生が「どちらでもない」か「嫌い」と回答した。

次に、運動・スポーツが得意・苦手の回答では、運動・スポーツが「とても得意」と回答したスポーツ学生は41.94%で「得意」を含めると90.97%が得意と回答した。一方、一般学生では、「どちらでもない」最も多く回答され44.44%となった。本研究で調査対象となった学生では、どちらの運動・スポーツに対する自己認識では、否定的な認識は少数であり、肯定的な認識が多く占めた。

表2 調査対象学生のスポーツに対する認識(好き・得意)

	とても好き	好き	どちらでもない	嫌い	とても嫌い
スポーツ学生	70.97 (22)	19.35 (6)	9.68 (3)	0.00 (0)	3.23 (1)
一般学生	27.77 (5)	33.33 (6)	33.33 (6)	5.60 (1)	0.00 (0)
両群人数小計	27	12	9	1	1
	とても得意	得意	どちらでもない	苦手	とても苦手
スポーツ学生	41.94 (13)	29.03 (9)	29.03 (9)	0.00 (0)	3.23 (1)
一般学生	16.12 (5)	11.11 (2)	44.44 (8)	16.37 (3)	0.00 (0)
両群人数小計	18	11	17	3	1

単位:%()内は実人数

4.3 高等学校での保健体育科の体育授業評価得点

表3は、スポーツ学生と一般学生が回答した高等学校保健体育科の「体育授業評価尺度」による30項目別の得点平均値と標準偏差である。スポーツ学生では、「運動の喜び」の9項目、「授業内容に対する評価」の8項目、「授業に対する価値観」の8項目で一般学生の得点平均値を上回る回答を得た。「運動の喜び」では、①快い興奮、⑥友達を作る場、⑨体育科の価値（質問文：体育は教科の中で最も価値あるものの一つだ）にて得点平均値が高値を示した。一方、④苦しみよりも喜びでは、一般学生の得点平均値が高い結果となった。「授業内容に対する評価」でもスポーツ学生の得点平均値は一般学生よりも高値を示す結果となった。⑩キビキビした動きづくりと⑭精神力の養成では相対的に得点平均値に差が認められる傾向があった。⑫体力づくりでは一般学生の得点平均値が上回った。「授業に対する価値観」では、8項目でスポーツ学生の得点平均値が上回る傾向が認められた（表3）。

4.4 体育実技B（レクスポーツ）の体育授業評価得点

表4は、大学体育として本学で履修した体育実技B（レクスポーツ）の体育授業評価得点の3つのカテゴリ別30項目の得点平均値と標準偏差である。「運動の喜び」では5項目でスポーツ学生の得点平均値が高値を示した。また、スポーツ学生に比べて一般学生では全ての項目で得点平均値が上昇する傾向認められた。「授業の内容に対する評価」ではスポーツ学生に対して一般学生の得点平均値が高く、7項目で上回る結果を得た。「授業に対する価値観」では、一般学生が6項目でスポーツ学生の得点平均値を上回る結果を得た。

表3 高等学校での保健体育科の体育授業評価得点

カテゴリー	No.	評価項目	スポーツ学生		一般学生	
			mean	SD	mean	SD
運動の喜び	1	快い興奮	0.871	0.430	0.444	0.705
	2	心身の緊張の開放	0.742	0.576	0.556	0.784
	3	生活の潤い	0.742	0.576	0.444	0.784
	4	苦しみより喜び	0.709	0.588	0.833	0.840
	5	集団活動の楽しみ	0.871	0.341	0.611	0.608
	6	友達を作る場	0.774	0.425	0.444	0.705
	7	積極的活動意欲	0.807	0.477	0.500	0.618
	8	自主的思考と活動	0.710	0.529	0.444	0.704
	9	体育科の価値	0.871	0.341	0.389	0.698
	10	授業時間数	0.419	0.720	0.278	0.669
		運動の喜び得点				
授業内容に対する評価	11	キビキビした動き	0.677	0.599	0.389	0.778
	12	体力づくり	0.581	0.672	0.667	0.594
	13	明朗活発な性格	0.516	0.724	0.333	0.767
	14	精神力の養成	0.516	0.679	0.222	0.647
	15	堂々頑張る習慣	0.645	0.667	0.444	0.705
	16	協力の習慣	0.871	0.341	0.833	0.515
	17	基本的理論の学習	0.677	0.653	0.444	0.784
	18	深い感動	0.226	0.845	0.556	0.873
	19	授業のまとめ	0.484	0.811	0.389	0.775
	20	授業の印象	0.548	0.885	0.333	0.840
		授業評価の得点				
	21	チームワークの発展	0.549	0.624	0.389	0.778
	22	みんなの活動	0.355	0.798	0.333	0.686
	23	みんなの喜び	0.327	0.702	0.167	0.786
	24	利己主義の抑制	0.258	0.815	0.389	0.698
	25	永続的な仲間	0.613	0.658	0.333	0.686
	26	主体的人間の育成	0.516	0.724	0.556	0.616
	27	理論と実践の統一	0.742	0.514	0.560	0.700
	28	授業のねらい	0.516	0.724	0.389	0.850
	29	教師の存在価値	0.677	0.702	0.444	0.784
	30	体育科目の必要性	0.645	0.755	0.444	0.784
		授業価値観の得点				

30の全ての質問項目でスポーツ学生に比べて一般学生の得点の増加率は大きく両群の差が小さくなる結果であった(表4)。

4.5 高等学校保健体育と大学体育(体育実技B(レクスポーツ))の体育授業評価得点の平均値の比較

(1) スポーツ学生の大学体育後の得点平均値の比較

スポーツ学生において高等学校の保健体育科と大学体育との体育授業評価得点の比較をした結果、主に②心身の緊張の解放、⑥友達をつくる場、⑧自主的試行と行動、⑰基礎理論の学習、⑳チームワークの発展、㉑みんなの活動、㉒みんなの喜び、㉔利己主義の抑制、㉖主体的人間の育成、㉗理論と実践の統一、㉘授業のねらい、㉙教師の存在価値などの20項目では得点平均値が増加する結果を得た。一方、㉑キビキビした動き、は有意に得点平均値が低下していた。

(2) 一般学生の大学体育後の得点平均値の変化

一般学生において高等学校の保健体育科と大学体育との体育授業評価得点の比較をした結果、主に②心身の緊張の解放、③生活の潤い、④苦しみよりも喜び、⑤集団活動の楽しみ、⑥友達を作る場、⑨体育科の価値、⑭精神力の養成、⑮堂々頑張る習慣、⑰基本的理論の学習、⑳授業の印象、および㉑～㉓の「授業に対する価値観」の全ての項目20項目で得点平均値が増加する結果を得た。一方、㉘深い感動(質問文:時々深い感動を覚えた)のみで得点平均値の減少が認められた。

表4 大学体育(レクスポーツ)受講後の体育授業評価得点

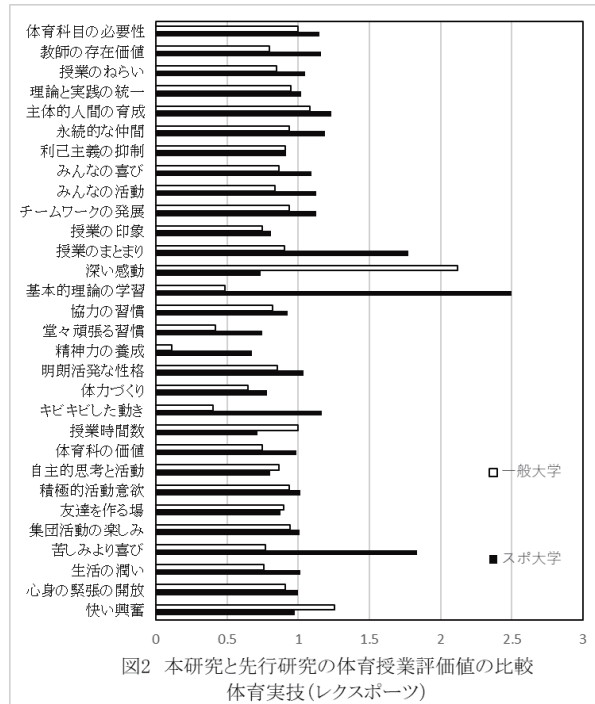
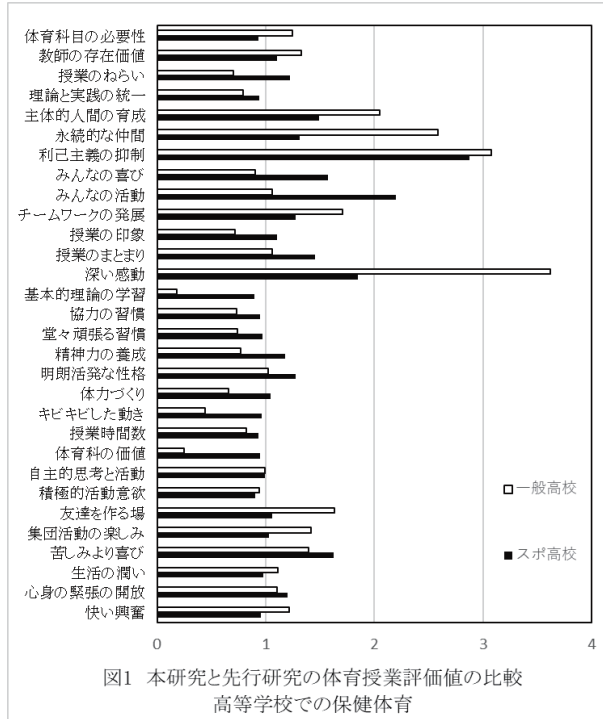
カテゴリ	No.	評価項目	スポーツ学生		一般学生	
			mean	SD	mean	SD
運動の喜び	1	快い興奮	0.839	0.454	0.611	0.502
	2	心身の緊張の開放	0.903	0.300	0.889	0.323
	3	生活の潤い	0.742	0.514	0.889	0.323
	4	苦しみより喜び	0.452	0.884	0.944	0.236
	5	集団活動の楽しみ	0.936	0.250	0.944	0.236
	6	友達を作る場	0.936	0.250	0.889	0.323
	7	積極的活動意欲	0.742	0.514	0.667	0.599
	8	自主的思考と活動	0.871	0.424	0.556	0.784
	9	体育科の価値	0.774	0.560	0.778	0.550
	10	授業時間数	0.419	0.848	0.444	0.616
		運動の喜び得点				
授業内容に対する評価	11	キビキビした動き	0.415	0.809	0.556	0.616
	12	体力づくり	0.581	0.765	0.778	0.428
	13	明朗活発な性格	0.613	0.667	0.500	0.707
	14	精神力の養成	0.645	0.668	0.722	0.461
	15	堂々頑張る習慣	0.742	0.576	0.833	0.384
	16	協力の習慣	0.936	0.250	0.944	0.236
	17	基本的理論の学習	0.968	0.177	0.944	0.236
	18	深い感動	0.355	0.798	0.167	0.786
	19	授業のまとめ	0.613	0.715	0.722	0.575
	20	授業の印象	0.484	0.851	0.722	0.461
		授業評価の得点				
授業に対する価値観	21	チームワークの発展	0.839	0.454	0.778	0.428
	22	みんなの活動	0.774	0.497	0.889	0.323
	23	みんなの喜び	0.807	0.477	0.778	0.428
	24	利己主義の抑制	0.774	0.497	0.833	0.515
	25	永続的な仲間	0.710	0.588	0.778	0.548
	26	主体的人間の育成	0.774	0.497	0.778	0.548
	27	理論と実践の統一	0.903	0.396	0.833	0.514
	28	授業のねらい	0.839	0.523	0.889	0.471
	29	教師の存在価値	0.839	0.454	0.889	0.471
	30	体育科目の必要性	0.742	0.631	0.722	0.575
		授業価値観の得点				

4.6 先行研究（塙と高橋（2013））と本研究の実測得点平均値の比較

(1) 高等学校保健体育科の体育授業評価における比較

塙と高橋（2013）と今回調査対象学生が回答した高等学校保健体育科の体育授業評価得点を比較した結果、今回の調査で2倍以上の得点平均値を示した項目が一般学生で4項目、スポーツ学生で2項目あった。一方、50%以下の項目では一般学生が3項目認められたが、スポーツ学生では認められなかった。

まず、一般学生で先行研究と比較して得点平均値が高値を示した項目は、⑱深い感動（質問文：体育の授業では、時々深い感動を覚えた）が364%、㉒利己主義の抑制（体育の授業では、能力の高いものや図々しいものを中心だった）が305.41%、㉕永続的な仲間（体育の授業のときの仲間は、その場限りの仲間すぎなかった）が246.22%、㉖主体的人間の育成（体育の授業では、人間の利己主義がむき出しになった）が201.21%であった。一方、スポーツ学生では、⑱深い感動（質問文：体育の授業では、時々深い感動を覚えた）が284.22%、㉒みんなの活動（体育の授業で、体育をする喜びを味わうことができたのは一部の人にすぎなかった）が234.85%、㉒利己主義の抑制（体育の授業では、能力の高いものや図々しいものを中心だった）が294.31%となる結果を得た。これらの結果とは反対に、先行研究値と比較して50%以下となった項目は、⑨体育科の価値（体育は教科の中で最も価値あるものの一つだ）、⑩キビキビした動き（体育の授業は、キビキビした動きのできる身体をつくった）、⑰基礎的理論の学習（体育の授業では、運動のやり方だけでなく、基本となる理論を学ぶことができた）であった。その他の項目は先行研究の得点平均値と同様であった（図1）。



(2) 大学体育の体育授業評価における比較

本研究での大学体育を意味する体育実技B（レクスポーツ）後の体育授業評価尺度の得点平均値を先行研究値と比較したところ、一般学生で得点平均値が高値を示した項目は、⑱深い感動（質問文：体育の授業では、時々深い感動を覚えた）のみで203.17%であった。一方、スポーツ学生では、先行研究値よりも高値を示した項目は、④苦しみよりも喜び（質問文：体育の授業では、喜びより苦しみが多かった（反転項目））が182.44%、⑰基礎的理論の学習（質問文：体育の授業では、運動のやり方だけでなく、基本となる理論を学ぶことができた）が250.01%、⑲授業のまとめ（体育の授業は、中途半端でまとめがなかった（反転項目））が176.54%の3項目であった。一方先行研究値と比べて50%以下の値を示した項目は、⑩キビキビした動き（体育の授業は、キビキビした動きのできる身体をつくった）、⑭精神力の養成（体育の授業は、たくましい精神力を養成してくれた）、⑮堂々頑張る習慣（体育の授業は、どんなときにも正々堂々と頑張る習慣を身に付けさせてくれた）、そして⑰基本的理論の学習（体育の授業では、運動のやり方だけでなく、基本となる理論を学ぶことができた）であった。その他の質問項目は先行研究の得点平均値とおおよそ同様であった。

5. 考察

本研究では大学体育の価値を再考することを目的に学習者である受講学生の意見を妥当性が認められた尺度を用いて検証することとした。また、今回使用する尺度は授業改善に役立てられる情報をフィードバックする目的に確立された尺度であるため、本学の体育実技（レクスポーツ）の授業改善に役立てられる知見を得ることも合わせて実施した。

5.1 高等学校保健体育科の体育授業評価得点

高等学校での保健体育授業に関する体育授業評価得点は、総じてスポーツ学生の得点平均値が高値を示す結果を得、埜と高橋（2002）と同様の結果であった。本研究で調査対象となった学生の多くは、高等学校に在籍していた時期が、新型コロナウイルス感染症が拡大した時期であり、保健体育授業も遠隔授業を余儀なくされた世代と考えられる。そのため、体育授業評価得点に何らかの影響が現れるのではないかと予測した。その結果、スポーツ学生と一般学生の間に複数の項目に差が認められる傾向が把握できた。しかし、この両群間の差は先行研究でも認められており、コロナ禍による体育授業評価得点への大きな影響は、今回の調査で明らかな差は認められない結果であった。その理由として第一に考えられるのが、調査したサンプル数が少なかったことがあげられる。今回は体育実技B（レクスポーツ）の受講学生のみを対象としたため限界があった。次に、調査対象学生が高等学校期に遠隔授業を余儀なくされたのは、2020年度の高等学校1年次であり、その後の高等学校2年次と3年次では適正な感染対策をした環境下にて保健体育科の実技授業が実施されたため、影響が最小限になったと推察される。いずれにせよ、一般学生の多くが高等学校での保健体育科の体育授業評価得点平均値が先行研究と同様に「心地よさを味わったり、心身の緊張感を解放されたりすることはなく、喜びよりも苦しみの方が強く感じていた。また、保健体育科の授業はキビキビした動きや人間性の育成に結びつくものではなく、一部のスポーツが得意な生徒が中心となって活動している」と感じていると推察できる結果であった。

上記の結果を踏まえと学習指導要領が保健体育科の目標に掲げる「体育の楽しさを味わい、生涯スポーツを実践する基礎を培う」という目標の実現は高等学校の保健体育科授業では難しいと考えられ、大学体育（本学では体育実技A及びB）にて体育授業に対する意識変容を目的に授業カリキュラムを編成しなければならないという課題が顕在化した。

5.2 体育実技B（レクスポーツ）の体育授業評価得点

体育実技B（レクスポーツ）を受講した一般学生の体育授業評価得点は大幅に増加し、スポーツ学生と同程度の得点平均値となった。一般学生の体育実技B（レクスポーツ）の受講をする前と後では体育授業評価得点に差が認められる項目が複数認められた。一方、スポーツ学生の体育授業評価得点の増加率は小さく体育実技B（レクスポーツ）を受講する前と後で得点を比較すると差が認められる項目は少数であった。この理由としては、スポーツ学生の得点初期値が高く、天井効果ではないかと考えられる。一般学生にとって体育実技B（レクスポーツ）は、「心身の緊張の解放の時間となり、生活の潤いを与える集団活動の楽しみの時間となり、友達づくりの機会ともなっている。また協力の習慣が身につくスポーツの基礎的理論の学習ができる時間となっている。」と推察できる結果を得、大学体育の価値が再確認できた。すなわち、一般学生が本学にて大学体育を履修する価値はこの点にある。今回調査対象となったスポーツ学生では、「授業に対する価値観」で得点平均値のみで得点上昇が認められたが、一般学生では「運動の喜び」、「授業内容に対する評価」、「授業に対する価値観」の全てのカテゴリで得点平均値の上昇が認められ、大学体育実技の履修により上昇した。特に、「授業に対する価値観」では得点上昇項目が多く認められ、⑩体育科目の必要性についても得点が大きく伸びた。これらの結果を考慮すると大学体育（体育実技A・B）を安易に選択化するのではなく、客観的な根拠を基に十分な議論が必要であろう。また、近年大学体育に期待されるアクティブラーニングとしての役割についてもその効果を適切な手法で測り、検証していく必要がある。

5.3 先行研究（埜と高橋（2012））との本研究結果との比較

今回の調査では、スポーツ学生と一般学生ともに高等学校の保健体育科の体育授業評価得点で「授業に対する価値観」で得点が2倍程度になる項目が認められた。それは「深い感動」、「みんなの活動」、「利己主義の抑制」、「永続的な仲間」、「主体的人間の育成」であった。一方、大学体育（体育実技B（レクスポーツ））の受講後では、スポーツ学生が「基本的理論の学習」と「授業のまとめ」にて先行研究と比較して2倍近い得点を示した。一般学生では、「深い感動」のみが先行研究と比較して2倍を超える得点を示した。これらの項目についての比較検討は引き続き調査を継続させ検討したい。

6. 結論

本研究では大学体育の体育実技B（レクスポーツ）と高等学校保健体育科の実技授業を体育業評価尺度により調査し、大学体育の価値を再確認した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) スポーツ学生の高等学校保健体育科の体育授業評価得点平均値は一般学生の得点平均値よりも総じて高値を示した。
- (2) 体育実技B（レクスポーツ）を受講した一般学生の体育授業評価得点平均値は増加する項目が多く認められた。
- (3) スポーツ学生の体育実技B（レクスポーツ）受講後の得点平均値の増加は少なく、初期値が高値であったことが影響していると考えられた。
- (4) 一般学生は、大学体育を「心身の緊張の解放の時間となり、生活の潤いを与える集団活動の楽しみの時間となり、友達づくりの機会ともなっている。また協力の習慣が身につくスポーツの基礎的理論の学習ができる時間となっている。」と考えていると推察でき、大学体育の価値が再確認できた。

参考文献・引用文献

- 岐阜協立大学教務委員会, 2022年度後期学生による授業アンケート全体集計(学科別), p1-2, 2023
- 埴佐敏, 高橋栄一, 生涯スポーツを志向した大学体育におけるスポーツの役割と意義, 新潟医療福祉学会誌 第8巻 第2号, p 52-57, 2008
- 引原有輝, 森田啓, 若林斉, 金田晃一, 実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響, 大学体育学第13号, p16-25, 2016
- 経済産業省・産業人材政策室, 人生100年時代の社会人基礎力について(平成30年2月(2018)),
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf (2023年5月10日最終アクセス)
- 金田晃一, 引原有輝, 佐藤和, 川西範明, 森田啓, 大学教養教育としての大学体育の位置づけに関する一考察:某工学系大学を例に, 大学教育学会誌第41巻第2号, p35-44, 2020
- 小林篤, 体育授業の研究, 大修館書店(東京), p170-22, 1982
- 文部科学省, 高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説保健体育編, 体育編, 第2章保健体育科の目標及び内容, 東洋館出版社(東京), p21-27, 2020
- 森田啓, 林容市, 引原有輝, 教養教育としての大学体育—サッカーを事例に, 大学教育学会誌第31巻第1号, p162-171, 2009
- 森田啓, 引原有輝, 谷合哲行, 東山幸司, 三村尚史, 亀山巖, 黒澤健太郎, 林久仁則, 松元剛, 種目特性と授業形態を探究課題とした教養教育としての大学体育: フラグフットボールと他大学との交流試合を事例に, 大学体育学第8号, p75-88, 2011
- 森田啓, 大学体育が目指すこと—高校体育, スポーツクラブ体育, 専門体育との関係から—, 大学体育研究第36号, p39-50, 2014
- 奥村基治, 梅野圭史, 辻野昭, 体育科の授業に対する態度尺度作成の試み: 小学校中学年児童を対象にして, 体育学研究第33巻第4号, p309-319, 1989
- 杉山進, 小林勝法, 奈良雅之, 大学体育の現状と課題, 体育・スポーツ哲学研究第23巻第2号, p1-15, 2011
- 高田俊也, 岡沢祥訓, 高橋健夫, 態度測定による体育授業評価法の作成, スポーツ教育学研究第20巻第1号, p31-40, 2000

付記

本研究の調査主旨をご理解いただき研究遂行にご協力頂いた学生に感謝申し上げます。なお、本論文に関して開示すべき利益相反事項はない。